

COVID19 第5報 (2020/5/17) おぐちこどもクリニック 小口弘毅

COVID19 の正体が少しずつ解ってきましたが、未だ未知の部分が多いのは同じです。You Tube を介して世界中の情報にアクセスし、開業小児科医の目を通しての COVID19 をレポートします。12 月初旬に武漢から発生してから 5 ヶ月で爆発的に世界中に広がり、3 月 13 日に WHO は **Pandemic (世界的大流行)** と宣言した後も、COVID19 感染者は増加し、今日の時点で 4,723,190 人、死者は 313,273 人に達しています。あっさりと死者数を書きましたが、予想もしなかった COVID-19 感染症にかかり、完全に隔離され、家族に看取られる事も難しい状況で亡くなっていった人の無念を思うと、言葉もありません。そのような人には、家族と親しい人たちは少なくとも 100 人はいるはずですから、悲嘆にくれている人々は世界中で 3 千万人はいると想像されます。現在アフリカやインド等の医療体制が貧弱な発展途上国に感染が広がっていますので、今後どのような展開になるか懸念されています。

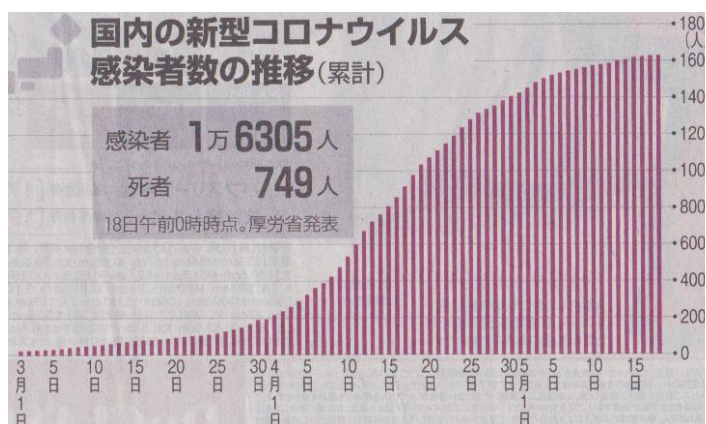
中国人観光客によって持ち込まれた COVID19 感染症により、イタリアなどヨーロッパの国々は悲惨な状況に陥りました。その後、まさかの米国ではヨーロッパの国々を遥かに凌ぐ勢いで感染は広がり、現時点の感染者 1,507,773 人、死者 90,113 人です。中国からというより、ヨーロッパからの旅行者と、ヨーロッパから帰国した米国によってニューヨークに持ち込まれた COVID-19 感染症は、瞬く間に、ニューヨーク州に広がり、壊滅的な状況となっています。ニューヨークでは 3 月 10 日から感染者が出始め、ほぼ 2 ヶ月後の 5 月 17 日には感染者数は 190,408 万人を超え、入院総数は 50,120 人、死者は 20,720 人となっており、死亡率は 10.9% であり、入院患者さんの死亡率は何と 41.3% です！ ICU に入院し、人工呼吸管理となると離脱出来た人は 2 割くらいとも言われています。感染者の一番多かった 4 月初旬の死者数は連日 700 人を超えていました。しかしこの時点から少しずつ状況は改善してきています。

私は 30 台前半にカリフォルニア大学 UCLA に 2 年間留学していましたが、米国の医学レベルが高い事も良く知っています。ニューヨークは津波のような感染に対して良く準備し、病院も破綻しながらも健闘していたと思います。ニューヨーク州知事のクオモ氏は敢然と立ち向かい、連日ニューヨーカーに向き合い、真摯にブリーフィングを行っている姿は立派でした。米国はきちんと情報開示しているのに、中国政府の隠蔽姿勢と民衆を抑圧している姿は対照的で、世界の人々から信頼を完全に失っています。日本、そして東京はなんとか土俵際で踏ん張っており、現時点の日本の患者数は 16,237 人で、死者は 725 人です。PCR 検査を広く実施しておらず、症状のある、あるいは疑わしいケースのみ検査をしているに過ぎないので実際の患者数はもっと多い可能性もあります。しかし、イタリアや米国の死者数からすると日本の死者数は極めて少なく、やはり患者数はそれほど多くないと思われれます。そして日本の患者数の推移を見ると、すでにピークにほぼ達しており、今後は徐々に減少していくと期待できます。イタリアもニューヨークも患者数は 10 倍から 100 倍のレベルですが、やはりピークを超えて、ゆっくりながら終息に向かっています。しかし冬を迎え、インフルエンザと一緒に COVID19 の流行第 2 波が来る可能性も指摘されています。東京都とニューヨーク州の人口はほぼ同じですが、東京都では、ほぼ同じ時期の 3 月初旬から流行が始まっていますが、非常に低いピークに達しつつあり、今後ゆっくりながら流行は終息に向かいつつあります。

ニューヨークの重症例の報道を見ると、COVID19 はインフルエンザより遥かにタチの悪い感染症であることは間違い無いと思います。成人例では、多臓器不全に進行し、また凝固能が高まり、血栓ができるのも大きな治療上の問題であることが解っています。小児の感染例は未だ少ないようですが (米国と中国からの報告によると全患者数に小児が占める割合は 2% くらい)、米国を中心に新たに不思議な症状を呈するケースが報告されてきていますので、今後十分に注意しなければなりません。日本ではまだ小児の症例が少なく

臨床像は不明です。アメリカ小児科学会は 102 例の小児 COVID19 の臨床像をまとめて報告し始めています。それによると一部の小児で川崎病あるいは Toxic Shock Syndrome（中毒性ショック症候群と訳すのでしょうか？）に似た症状を呈する事があるようです。症状としては長引く発熱、川崎病に似た発疹、手指の腫れと指先の皮がむけるなどの所見を認め、呼吸器系のみならず心臓、腎臓の機能不全に進行することもあります。このように小児においても多臓器にわたる炎症（免疫系の過剰反応か？）が起きているので、米国では **Multi-System Inflammatory Syndrome in Children (MIS-C)**：小児多臓器炎症症候群と呼ばれているようです。COVID 感染と MIS-C との因果関係については未だ明らかではなく、米国で研究が進められている最中です。

米国での小児入院例の 62%は 1 歳未満であり、やはり乳児ほど重症化しやすいと思われます。しかし小児の多くは軽症で、一般的なウイルス性の呼吸器感染症の病状を呈しますが、重篤化する可能性もあると警告が出されています。特に喘息、慢性肺障害、心奇形を含む心疾患、免疫低下をきたす疾患を持っている子どもはハイリスクと考えて下さい。



発熱、咳、多呼吸などの呼吸器症状、嘔吐、下痢、腹痛等の胃腸症状などの症状には注意して下さい。米國小児科学会は、健診、予防接種をスケジュールに沿って受けるように勧奨しています。何れにしてもお子さんに関して心配なことがあれば相談ください。